

群馬県施設イチゴIPM実践指標

(普及指導室)

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
防除計画の作成(必)	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫防除計画を作成している。	1			
健全苗の確保	親株は、極力毎年更新し、病害虫の感染・寄生のないものを使用している。特に炭疽病、萎黄病等が発病した育苗施設の苗は親株として使用していない。育苗中に病害虫の発生が見られたら、早期に防除、除去し、健全苗を定植している。	1			
	雨よけ栽培の育苗施設では頭上灌水を避け、立枯性病害(炭疽病、疫病)の拡散防止を図っている。	1			
	育苗中は、灌水が過度にならないよう留意するとともに、ポットの間隔を開ける等して、多湿にならないようにしている。	1			
	育苗に用いる培養土や資材は、清潔なものを使用している。	1			
	ハダニやうどんこ病等の本ほへの持ち込みを防ぐため、育苗期の薬剤防除を徹底している。	1			
土壌消毒	土壌病害、線虫の発生が懸念されるほ場においては、植付前に薬剤による土壌消毒や太陽熱消毒、土壌還元消毒を実施している。	1			
栽培ほ場周辺の雑草管理	ほ場への雑草種子の持ち込みや雑草を発生源とする害虫の飛び込みを抑制するため、施設周辺の雑草防除に努めている。	1			
排水対策	ほ場の排水対策に留意し、水はけを良好に保っている。	1			
施設内への害虫侵入防止措置	施設内への害虫の侵入を防止するため、施設開口部にネット等を展張している。	1			
	飛来性害虫を捕殺するため、粘着トラップ等を設置している。	1			
	シルバーフィルム等の反射資材など、害虫忌避効果のある資材を設置している。	1			
施肥管理	必要に応じて土壌診断を受け、結果を参考にして適切な施肥を行うことで健全な作物育成を行っている。特に急激な肥効、肥料切れは発病を助長するので、品種の特性及び生育に応じた適正な施肥量を守っている。	1			
作物の栽培管理	植え付け前までに雑草が発生した場合は、雑草の種子結実前に除草を行っている。	1			
	マルチ等により畦面を被覆し、泥のはね上がりを防止している。	1			
	品種に応じた適正な栽植密度で定植している。	1			
	施設内が高湿・多湿にならないよう適正な換気を行っている。	1			
病害虫発生予察情報等の確認(必)	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入力し、確認している。また、フェロモントラップ等を用いて地域で予察を行っている場合には、その情報を入力し、防除の要否を検討している。	1			
病害虫防除の要否の判断(必)	施設内を見回り、病害虫の発生や被害を把握するとともに、気象予報などを考慮して防除の要否を判断している。また必要に応じて粘着トラップ等を設置し、害虫の発生動向を把握することで、防除の要否、防除時期を判断している。	1			
	前作や近隣の作物、施設周辺における病害虫の発生状況を確認し、病害虫の発生を予測している。	1			
生物農薬の利用	生物農薬の使用にあたっては、事前にその使用方法や関連技術、使用する化学農薬の特性等について、都道府県の病害虫防除所や普及指導センター等と綿密な打ち合わせを行う等十分な検討を行い、計画をたてている。	1			
	ハダニ類対策に天敵昆虫(ミヤコカブリダニ・チリカブリダニ)を有効に活用している。	1			
	ワタアブラムシ対策に天敵昆虫(コレマンアブラバチ)を有効に活用している。	1			
	コナジラミ類対策に微生物農薬(ベキロマイセス・フモロセウス剤等)を有効に活用している。	1			
	うどんこ病、灰色かび病対策にバチルス・スズチリス剤等の微生物農薬を有効に活用している。	1			
農薬の適正使用(必)	薬剤散布にあたっては、下葉かき作業後に行う等、病害虫の発生部位に薬剤が十分かかるようにしている。	1			
	定植時に粒剤等を処理し、少量の薬剤でその後の害虫の発生を有効に抑制している。	1			
	天敵に影響の少ない殺虫剤を利用している。	1			
	農薬を使用する場合には、同系統の薬剤を繰り返し使用していない。さらに、当該地域で薬剤感受性の低下または薬剤耐性菌が確認されている農薬は使用を控えている。	1			
	農薬を散布する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用している。	1			
ほ場の衛生管理	土壌病害侵入防止のため、耕起を行う際には、病害発生がないか発生程度の低いほ場から順に行うとともに、ほ場を移動する際には作業機等に付着した土をよく落とすとしている。	1			
	発病株や罹病部位は、発見次第、早期に除去してほ場外に出し、適切に処分している。	1			
収穫後残渣の処理(必)	収穫後残渣は病害虫の発生源となるため、早めに処分している。可能であれば収穫終了後、施設内を丸め切り、蒸し込みを行い、害虫の施設外への逃亡を防止している。	1			
作業日誌の記帳(必)	作業作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係わる栽培管理状況を作業日誌として別途記録している。	1			
研修会等への参加(必)	県や農業協同組合などが開催するIPM研修会等に参加している。	1			
		合計 点数			
		評価 結果			

群馬県施設キュウリIPM実践指標

(普及指導室)

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
防除計画の作成(必)	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫防除計画を作成している。	1			
健全種子の確保	苗立枯病などの発生を予防するため、消毒された種子を使用している。消毒されていない種子は農薬の種子粉衣等の処理を行っている。	1			
適正な品種の選定	土壌病害の発生を予防するため、抵抗性が高い台木を作型と品質を考慮しながら選択している。	1			
健全苗の確保	病害虫の発生を予防するため、育苗には病原菌に汚染されていない培養土や資材を用いている。苗を購入する場合は健全苗を確保している。	1			
	健全な苗の育成のため、適正な播種量、施肥量を守り、育苗中は過度なかん水を選べるなど、高温多湿にならないようにしている。	1			
	育苗施設や育苗ほ場への害虫侵入を抑制するため、施設開口部のネット被覆、粘着トラップの設置、シルバーフィルム等の反射資材の設置などの、物理的防除手段を講じている。	1			
	育苗中に病害虫の発生が見られたら、早期に防除、除去し、健全苗のみを定植している。	1			
ほ場の選択と改善	作物の栽培に適した水はけの良いほ場を選択している。排水の悪いほ場に作付けする場合は高畦とする等対策を講じている。	1			
栽培ほ場周辺の雑草管理	ほ場への雑草種子の持ち込みや雑草を発生源とする害虫の飛び込みを抑制するため、施設周辺の雑草防除に努めている。	1			
施設内への害虫侵入防止措置	施設内への害虫の侵入を防止するため、施設開口部にネット等を展開している。	1			
	飛来性害虫を捕殺するため、粘着トラップ等を設置している。	1			
	シルバーフィルム等の反射資材など、害虫忌避効果のある資材を設置している。	1			
土壌消毒	ホモプシス根腐病、ネコブセンチュウの発生が懸念されるほ場においては、植え付け前に薬剤による土壌消毒や太陽熱消毒、土壌還元消毒を実施している。	1			
対抗植物の作付け	ギニアグラス、クワタラリア等を作付けし、センチュウ密度低下を図っている。	1			
作物の栽培管理	必要に応じて土壌診断を受け、結果を参考にして適切な施肥を行い、過剰施肥を避けている。また土壌pHを測定し、適正な土壌pHに矯正している。	1			
	植え付け前までに雑草が発生した場合は、雑草の種子結実前に除草を行っている。	1			
	マルチ等により畦面を被覆し、泥のはね上りを防止している。	1			
	品種に応じた適正な栽植密度で定植している。	1			
	品種や作型に応じた適正な摘葉・整枝を行っている。	1			
	施設内が高湿・多湿にならないように適正な換気を行っている。	1			
病害虫発生予察情報の確認(必)	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入力し、確認している。また、フェロモントラップ等を用いた地域で予察を行っている場合には、その情報を入力し、防除の要否を検討している。	1			
病害虫防除の要否の判断(必)	ほ場内を見回り、病害虫の発生や被害を把握するとともに、気象予報などを考慮して防除の要否を判断している。また必要に応じて粘着トラップ等を設置し、害虫の発生動向を把握することで、防除の要否、防除時期を判断している。	1			
	前作や近隣の作物、施設周辺における病害虫の発生状況を確認し、病害虫の発生を予測している。	1			
農薬の適正使用(必)	定植時には殺虫剤を施用し、生育初期の害虫発生を防止している。	1			
	作物の生育に合わせて、十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量・散布方法を決定している。	1			
	農薬を散布する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用している。	1			
	天敵に影響の少ない殺虫剤を利用している。	1			
	農薬を使用する場合には、同系統の薬剤を繰り返し使用していない。さらに、当該地域で薬剤感受性の低下または薬剤耐性菌が確認されている農薬は使用を控えている。	1			
生物農薬の利用	適用のある害虫に対して生物農薬(天敵昆虫)を有効に活用している。	1			
	適用のある害虫に対して、BT(バチルス・チューリンゲンシス)剤やボアベリア・バシアーナ剤などの微生物農薬を有効に活用している。	1			
	適用のある病害に対して、バチルスズブチリス剤などの微生物農薬を有効に活用している。	1			
ほ場の衛生管理	罹病株や果実、摘葉した葉等は放置せず、適切に処分している。ウイルス病、細菌病等回復が困難な病害による発病株は、発見次第早急に抜き取って適切に処分している。	1			
	ウイルス病や細菌病の発生が懸念される場合には、発生を助長させないように器具、手の衛生管理を行っている。前作において病害が発生したほ場では、必要に応じて支柱などの用具を消毒している。	1			
収穫後残渣の処理(必)	収穫後残渣は病害虫の発生源となるため、早めに処分している。可能であれば収穫終了後、施設内を閉め切り、蒸し込みを行い、害虫の施設外への逃亡を防止している。	1			
作業日誌の記帳(必)	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係わる栽培管理状況作業日誌として別途記録している。	1			
研修会等への参加(必)	県や農業協同組合などが開催するIPM研修会等に参加している。	1			
		合計 点数			
		評価 結果			

群馬県施設トマトIPM実践指標

(普及指導室)

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
防除計画の作成(必)	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫防除計画を作成している。	1			
健全種子の確保	病害の発生を予防するため、消毒されている種子を使用している。消毒されていない種子は農薬の種子粉衣等の処理を行っている。	1			
適正な品種の選定	土壌病害の発生を予防するため、病害に対する抵抗性品種もしくは抵抗性が高い台木を作型と品質を考慮しながら選択している。	1			
健全苗の確保(必)	病害虫の発生を予防するため、育苗には病原菌に汚染されていない培養土や資材を用いている。苗を購入する場合は健全苗を確保している。	1			
	育苗中に病害虫の発生が見られたら、早期に防除、除去し、健全苗のみを定植している。	1			
	健全な苗の育成のため、適正な播種量、施肥量を守り、育苗中は過度なかん水を避けるなど、高温多湿にならないようにしている。	1			
	育苗施設や育苗ほ場への害虫侵入を抑制するため、施設開口部のネット被覆、粘着トラップの設置、シルバーフィルム等の反射資材の設置などの、物理的防除手段を講じている。	1			
ほ場の選定と改善(必)	黄化葉巻病の発生地域や発生が懸念される地域では、育苗施設の開口部に0.4mm目合い以下の防虫ネットを、施設内環境等を考慮しながら導入している。	1			
	作物の栽培に適した水はけの良いほ場を選択している。排水の悪いほ場に作付けする場合は高畦とする等対策を講じている。	1			
栽培ほ場周辺の雑草管理(必)	ほ場への雑草種子の持ち込みや雑草を発生源とする害虫の飛び込みを抑制するため、施設周辺の雑草防除に努めている。	1			
施設内への害虫侵入防止措置	施設内への害虫の侵入を防止するため、施設開口部にネット等を展張している。黄化葉巻病の発生地域や発生が懸念される地域では、施設開口部に0.4mm目合い以下の防虫ネットを、施設内環境等を考慮しながら導入している。	1			
	飛来性害虫を捕殺するため、粘着トラップ等を設置している。	1			
	シルバーフィルム等の反射資材など、害虫忌避効果のある資材を設置している。	1			
土壌消毒	土壌病害、線虫の発生が懸念されるほ場においては、植付前に薬剤による土壌消毒や太陽熱消毒、土壌還元消毒を実施している。	1			
対抗植物の作付け	ギニアグラス、クロタリヤ等を作付けし、センチュウ密度の低下を図っている。	1			
作物の栽培管理	必要に応じて土壌診断を受け、結果を参考にして適切な施肥を行い、過剰施肥を避けている。また土壌pHを測定し、適正な土壌pHに矯正している。	1			
	植え付け前までに雑草が発生した場合は、雑草の種子結実前に除草を行っている。	1			
	マルチ等により畦面を被覆し、泥のはね上りを防止している。	1			
	品種に応じた適正な栽植密度で定植している。	1			
	品種や作型に応じた適正な摘葉・整枝を行っている。	1			
	施設内が高温・多湿にならないように適正な換気を行っている。高温・多湿になる作型、あるいは目合いの小小さなネットを展張した場合には循環扇、換気装置等、強制換気できる設備を設置している。	1			
病害虫発生予察情報の確認(必)	マルハナバチやミツバチなどの訪花昆虫を利用している。マルハナバチは施設外への逃亡防止のためネット等の適切な展張や、栽培終了後の巣箱の適正処理を図っている。	1			
	病害虫防除所が発表する発生予察情報入手し、確認している。また、フェロモントラップ等を用いて地域で予察を行っている場合には、その情報を入手し、防除の要否を検討している。	1			
病害虫防除の要否の判断(必)	ほ場内を見回り、病害虫の発生や被害を把握するとともに、気象予報などを考慮して防除の要否を判断している。また必要に応じて粘着トラップ等を設置し、害虫の発生動向を把握することで、防除の要否、防除時期を判断している。	1			
	前作や近隣の作物、施設周辺における病害虫の発生状況を確認し、病害虫の発生を予測している。	1			
農薬の適正使用(必)	定植時には殺虫剤を施用し、生育初期の害虫発生を防止している。	1			
	作物の生育に合わせ、十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量・散布方法を決定している。	1			
	農薬を散布する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用している。	1			
	天敵に影響の少ない殺虫剤を利用している。	1			
生物農薬の利用	農薬を使用する場合には、同系統の薬剤を繰り返し使用していないし、さらに、当該地域で薬剤感受性の低下または薬剤耐性菌が確認されている農薬は使用を控えている。	1			
	適用のある害虫に対して生物農薬(天敵昆虫)を有効に活用している。	1			
	適用のある害虫に対して、BT(バチルス・チューリンゲンシス)剤やボーベリア・バシアーナ剤などの微生物農薬を有効に活用している。	1			
ほ場の衛生管理	適用のある病害に対して、バチルスズブチリス剤などの微生物農薬を有効に活用している。	1			
	罹病株や果実、摘葉した葉等は放置せず、適切に処分している。ウイルス病、細菌病等回復が困難な病害による発病株は、発見次第早急に抜き取って適切に処分している。	1			
収穫後残渣の処理(必)	ほ場周辺のこぼれ種などから生えたトマトは黄化葉巻病等の感染源になるので処分している。	1			
	ウイルス病や細菌病の発生が懸念される場合には、発生を助長させないように器具、手の衛生管理を行っている。前作において病害が発生したほ場では、必要に応じて支柱などの用具を消毒している。	1			
収穫後残渣の処理(必)	収穫後残渣は病害虫の発生源となるため、早めに処分している。可能であれば収穫終了後、施設内を閉め切り、蒸し込みを行い、害虫の施設外への逃亡を防止している。	1			
作業日誌の記帳(必)	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況作業日誌として別途記録している。	1			
研修会等への参加(必)	県や農業協同組合などが開催するIPM研修会等に参加している。	1			
		合計 点数			
		評価 結果			

## 群馬県施設ナスIPM実践指標

(普及指導室)

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
防除計画の作成(必)	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫防除計画を作成している。	1			
健全種子の確保	病害の発生を予防するため、消毒された種子を使用している。消毒されていない種子は農業の種子粉衣等の処理を行っている。	1			
適正な品種の選定	土壌病害の発生を予防するため、抵抗性が高い台木を作型と品質を考慮しながら選択している。	1			
健全苗の確保(必)	病害虫の発生を予防するため、育苗には病原菌に汚染されていない培養土や資材を用いている。苗を購入する場合は健全苗を確保している。	1			
	健全な苗の育成のため、適正な播種量、施肥量を守り、育苗中は過度なかん水を選けるなど、高温多湿にならないようにしている。	1			
	育苗施設や育苗ほ場への害虫侵入を抑制するため、施設開口部のネット被覆、粘着トラップの設置、シルバーフィルム等の反射資材の設置などの、物理的防除手段を講じている。	1			
	育苗中に病害虫の発生が見られたら、早期に防除、除去し、健全のみを定植している。	1			
ほ場の選択と改善(必)	作物の栽培に適した水はけの良いほ場を選択している。排水の悪いほ場に作付けする場合は高畦とする等対策を講じている。	1			
栽培ほ場周辺の雑草管理(必)	ほ場への雑草種子の持ち込みや雑草を発生源とする害虫の飛び込みを抑制するため、施設周辺の雑草防除に努めている。	1			
施設内への害虫侵入防止措置	施設内への害虫の侵入を防止するため、施設開口部にネット等を展張している。	1			
	飛来性害虫を捕殺するため、粘着トラップ等を設置している。	1			
	シルバーフィルム等の反射資材など、害虫忌避効果のある資材を設置している。	1			
土壌消毒	半身萎凋病、ネコブセンチュウの発生が懸念されるほ場においては、植え付け前に薬剤による土壌消毒や太陽熱消毒、土壌還元消毒を実施している。	1			
対抗植物の作付け	ギニアグラス、クワクラリア等を作付けし、センチュウ密度低下を図っている。	1			
作物の栽培管理	必要に応じて土壌診断を受け、結果を参考にして適切な施肥を行い、過剰施肥を避けている。また土壌pHを測定し、適正な土壌pHに矯正している。	1			
	植え付け前までに雑草が発生した場合は、雑草の種子結実前に除草を行っている。	1			
	マルチ等により畦面を被覆し、泥のはね上がりを防止している。	1			
	品種に応じた適正な栽植密度で定植している。	1			
	品種や作型に応じた適正な摘葉・整枝を行っている。	1			
	施設内が高温・多湿にならないように適正な換気を行っている。	1			
病害虫発生予察情報の確認(必)	マルハナバチやミツバチなどの訪花昆虫を利用している。マルハナバチは施設外への逃亡防止のためネット等の適切な展張や、栽培終了後の巣箱の適正処理を図っている。	1			
	病害虫防除所が発表する発生予察情報入手し、確認している。また、フェロモントラップ等を用いて地域で予察を行っている場合には、その情報入手し、防除の要否を検討している。	1			
病害虫防除の要否の判断(必)	ほ場内を見回り、病害虫の発生や被害を把握するとともに、気象予報などを考慮して防除の要否を判断している。また必要に応じて粘着トラップ等を設置し、害虫の発生動向を把握することで、防除の要否、防除時期を判断している。	1			
	前作や近隣の作物、施設周辺における病害虫の発生状況を確認し、病害虫の発生を予測している。	1			
農薬の適正使用(必)	定植時には殺虫剤を施用し、生育初期の害虫発生を防止している。	1			
	作物の生育に合わせ、十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量・散布方法を決定している。	1			
	農薬を散布する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用している。	1			
	天敵に影響の少ない殺虫剤を利用している。	1			
	農薬を使用する場合には、同系統の薬剤を繰り返し使用していないし、さらに、当該地域で薬剤感受性の低下または薬剤耐性菌が確認されている農薬は使用を控えている。	1			
生物農薬の利用	適用のある害虫に対して生物農薬(天敵昆虫)を有効に活用している。	1			
	適用のある害虫に対して、BT(バチルス・チューリンゲンシス)剤やボーベリア・パシアーナ剤などの微生物農薬を有効に活用している。	1			
	適用のある病害に対して、バチルスズブチリス剤などの微生物農薬を有効に活用している。	1			
ほ場の衛生管理	罹病株や果実、摘葉した葉等は放置せず、適切に処分している。ウイルス病、細菌病等回復が困難な病害による罹病株は、発見次第早急に抜き取って適切に処分している。	1			
	ウイルス病や細菌病の発生が懸念される場合には、発生を助長させないように器具、手の衛生管理を行っている。前作において病害が発生したほ場では、必要に応じて支柱などの用具を消毒している。	1			
収穫後残渣の処理(必)	収穫後残渣は病害虫の発生源となるため、早めに処分している。可能であれば収穫終了後、施設内を閉め切り、蒸し込みを行い、害虫の施設外への逃亡を防止している。	1			
作業日誌の記帳(必)	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況作業日誌として別途記録している。	1			
研修会等への参加(必)	県や農業協同組合などが開催するIPM研修会等に参加している。	1			
		合計 点数			
		評価 結果			

群馬県施設ホウレンソウIPM実践指標

(普及指導室)

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
防除計画の作成(必)	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫防除計画を作成している。	1			
健全種子の確保	苗立枯病予防のため、消毒された種子を使用している。消毒されていない種子は農薬の種子粉衣等の処理を行っている。	1			
適正な品種の選定	地域に発生するべと病のレースを考慮して、抵抗性品種を選択している。	1			
栽培ほ場周辺での雑草管理	ほ場への雑草種子の持ち込みや雑草を発生源とする害虫の飛び込みを抑制するため、ほ場周りの雑草防除に努めている。	1			
ほ場の選択と改善	作物の栽培に適した水はけの良いほ場を選択している。排水の悪いほ場に作付けする場合は、高畦とする等対策を講じている。	1			
作物の栽培管理	必要に応じて土壌診断を受け、結果を参考にして適切な施肥を行い、過剰施肥を避けている。また土壌pHを測定し、適正な土壌pHに矯正している。	1			
	ほ場に有機物を施用する場合は未熟なものの施用を避け、タネバエやコナダニの被害を防いでいる。	1			
	播種までに雑草が発生した場合は、種子の結実前に耕起耕耘を行っている。多年性雑草は、地下茎まで抜き取り、適切に処分している。	1			
	前作及びほ場での雑草の発生状況、草種等を確認し、適切な除草剤を選定し処理している。	1			
	品種に応じた適正な栽植密度としている。	1			
施設内への害虫侵入防止措置(必)	施設内への害虫の侵入を防止するため、栽培施設を紫外線除去フィルムで被覆している。	1			
	施設内への害虫の侵入を防止するため、施設開口部にネット等を展張している。	1			
	飛来性害虫を捕殺するため、粘着トラップ等を設置している。	1			
	シルバーフィルム等の反射資材など、害虫忌避効果のある資材を設置している。	1			
土壌消毒	土壌病害、線虫の発生が懸念されるほ場においては、植付前に薬剤による土壌消毒や太陽熱消毒、土壌還元消毒を実施している。	1			
対抗植物の作付け	ギニアグラス、クロタラリア等を作付けて、センチュウの密度低下を図っている。	1			
病害虫発生予察情報の確認(必)	病害虫防除所が発表する発生予察情報入手し、確認している。また、フェロモントラップ等を用いて地域で予察を行っている場合には、その情報入手し、防除の要否を検討している。	1			
病害虫防除の要否の判断(必)	ほ場内を見回り、生育初期から病害虫の発生や被害を把握するとともに、気象予報などを考慮して防除の要否を判断している。	1			
生物農薬の利用	適用のある害虫に対して、BT(バチルス・チューリンゲンシス)剤やボーベリア・バシアーナ剤などの微生物農薬を有効に活用している。	1			
農薬の適正使用(必)	抵抗性の発達を防ぐため、特定の成分の農薬を繰り返し使用していない。	1			
	農薬を散布する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用している。	1			
ほ場の衛生管理	べと病等の罹病葉は放置せず適切に処分している。ウイルス病など回復困難な発病株は、発見次第早急に抜き取って適切に処分している。	1			
収穫後残渣の処理(必)	収穫後残渣は病害虫の発生源となるため、早めに処分している。	1			
作業日誌の記帳(必)	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係わる栽培管理状況を作業日誌として別途記録している。	1			
研修会等への参加(必)	果や農業協同組合などが開催するIPM研修会等に参加している。	1			
		合計 点数			
		評価 結果			